今西錦司・西堀栄三郎、梅棹忠夫
～山の大先輩たちとわたし

上田（あげた） 豊

（この稿は、西堀榮三郎記念「探検の殿堂」発行の「未知への挑戦シリーズ②山岳編『リーダーシップとフォロワーシップ』、二〇二三年三月」に掲載された。「探検の殿堂」のご厚意により、ここに転載させていただく。同書では、全原稿の文体をていねい形にそろえて編集されたが、ここでは寄稿時の文体のままとした。）

●　四一年上の今西錦司さん

《渓流釣り》

今西さんが京都近郊の山へ行くときは、京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）の会員・土倉九三さんが、自分の車に乗せて同行した。そんなとき、土倉さんは京都大学の山岳部員をさそうことがあった。

このさそいに乗ったのが、わたしが今西さんと山に同行した、ただ一度の経験になった。京都北山への日帰りの渓流釣りで、一九六六年七月のことだ。荷物

を担ぐために山岳部員が呼ばれたのではなかった。今西さんは最も釣れそうな沢筋に一人で入った。土倉さんは付いて行かずに、別の沢筋へわたしを連れていった。

帰る時間になって合流した。今西さんの浅い竹かごの中には、岩魚が一匹、幅の広い緑の葉の上に横たわっていた。獲物は大きくはないが、その姿は端麗で、かごと葉につつまれた一幅の絵のような空間をつくっていた。最も姿の良いものを残し、他の魚は渓流に戻したのだろうか。今西さんの美学の一端を見たような気がした。

《鎖国状態のブータンへ》

今西さんの釣りに付いていった時、わたしは山岳部の５回生で、理学部では４回生だった。一九六四年、３回生のとき山岳部の遠征隊でネパール・ヒマラヤに行くことができ、一年間休学したのだ。

この年の年度末でわたしは専門の気象学の卒業論文をまとめるべく、観測してデータを集めていた。その卒論を仕上げにかかろうかという冬になって、当時ＡＡＣＫの会長だった今西さんからの話が山岳部に届いた。当時は鎖国状態だったブータンへの遠征計画を、山岳部でやらないかとのこと。ＡＡＣＫの方は、ネパールのヤルン・カン登山計画の実現に集中するた

めらしい。

前回わたしが参加したヒマラヤ計画は、すでに上級生が立てて走り始めていた。それに遅れて乗っからせてもらったという負い目のような気持があった。今度こそと、わたしは卒論そっちのけで、ブータン計画の作成に取りかかった。目標はブータン・ヒマラヤの最高峰ガンケルプンツムの初登頂。鎖国状態の国に、特にツテがあるわけでもなかった。

わたしはＡＡＣＫの理事会に出て、計画を発表した。その時の服装には、普段は着ない詰襟の学生服を選んだ。今西会長やブータン探検の先達・中尾佐助さん他、そうそうたる人たちが並んでいた。計画は良い感触で受けとめられた。同席していた先輩によると、年配の列席者には、学生服が好感を持たれたようだった。今西さんの発案で、ブータン国王へ送る計画申請書は、英文だけでなくチベット文も付けることになり、東京在住のチベット人の高僧にお願いした。

ピンチの卒論は、発表審査がせまるなか、剛腕の助教授が大学院生を動員して論文の図表作成などを助けてくれた。論文の主要部分の作文と全体の清書は、自分でやった。わたしの研究発表の順番も、最後に回してくれたので、審査に間に合った。

結局、ブータン計画は大幅に縮小され、ブータンの外交権を握っているインド政府との交渉のため、一

九六七年一一月末にわたしはニューデリーに向かった。半年間滞在して粘ったが、ブータンへの門戸は思うようには開かれなかった。そうして小野寺幸之進隊長と一度、３回生の市川光雄と一度、ブータンへの短期入国は果たしたものの、街道筋でしか行動を許されなかった。

帰国後、今西さんのお宅へ、ブータンの民芸品のおみやげを持って報告に行った。入国交渉の合間に、市川とネパールに行ってヒマラヤの小登山をしたことがあり、その事にもふれた。これを今西さんは、不快に感じられたようだった。おそらく今西さんは、目的に集中した執念と粘りを重んじたからだろう。だが、わたしたちはネパールへ転身したわけでなく、余暇を活用したのだ。ヒマラヤは初めての市川と氷河の研究をめざしていたわたしにとっては、半年ねばってヒマラヤの氷雪に触れないまま帰るなんて、耐えがたかったのだ。

（追記：　この時から三〇年を経て、ブータンでの氷河・氷河湖調査が実現し、現地機関と共同で一九九八年から始められた。かつて報いられなかったブータン・ヒマラヤへの執念が、形を変えて実を結んだ思いがする。）

《ヤルン・カン遭難の検討会にて》

一九七三年五月一四日、西堀栄三郎さんを隊長とするＡＡＣＫ隊は、ヤルン・カン（カンチェンジュンガ西峰、八五〇五メートル）に初登頂した。当時の未踏峰のなかでは一番高い山で、初登頂を日本隊が果した山のうち、最も高い山になる。

だが、登頂した松田隆雄さんとわたしは頂上からの帰途、ボンベの酸素は切れ夜も深まりルートをはずして不時露営。翌朝わたしは松田さんを残し、帰路のためにデポしてあった酸素ボンベを捜しに出た。行きつ戻りつの彷徨のすえ再び夜をむかえてから、登ってきた救援隊と合流。しかし、松田さんは行方不明となった。

帰国後、ＡＡＣＫによるヤルン・カンの登頂・遭難の報告・検討会が開かれた。この会でわたしに最も印象深かったのは、今西さんが頂上アタック隊の遭難について発言された内容だ。当時七〇才を越え、ご自身のヒマラヤ登山の経験は二〇年程も前の六一〇〇メートル峰初登頂だけだった。だが、指摘される事々は的確で、核心をついていた。遭難の当事者であるわたしには厳しい事柄もあったが、登山の基本をキッチリと押さえた意見なので、素直に受けとめることができ、敬服した。

この「ヤルン・カン遠征報告・検討会」は、一九七三

年九月一五・一六日に京大で開かれ、ＡＡＣＫ時報８号（一九七六）に全ての発言が記録されている。この二日間にわたる多面的な論議の終盤、「総括」のなかで今西さんは、おおむね次のような趣旨の指摘をされた。

・・・西堀は、これまで関係した山行で一度も事故を起こしていない。第一次南極越冬隊長としても、無事に初越冬を果たした。ヤルン・カンにおいても、登頂の重要な局面で、もし彼が隊長としてベース・キャンプに居たならば、登頂を無事に運ぶうえで貴重な役割を果しただろう。・・・

この指摘には、わたしは疑問を感じた。西堀さんは当時七〇才。この年令にとってベース・キャンプの高さ五二一〇メートルは、八千メートル相当の負担になるともいわれていた。登攀の指揮は、登攀隊長である樋口明生さんがとっていた。西堀さんはベース・キャンプを訪れ数日滞在したことはあったが、周りに迷惑をかけないようにと、普段は下方に離れたキャンプで過ごしておられた。今西さんの発言の意図は、指揮系統の尊重と西堀さんへの厚い信頼からだろうが、現場に居た者としては違和感がある。これには、四〇年余りの世代の違いによる所もあるのだろうか。

●　四〇年上の西堀栄三郎さん

《南極へのわたしの道》

京大山岳部にわたしが居た頃、ヒマラヤ研究会と極地研究会というのがあって、それぞれ週一回、有志が夜に集まって、外国隊の記録の翻訳、探検記の原書輪読や自分たちの計画を考えたりしていた。場所は、北白川にあった一〇年ほど先輩の谷さんの持ち家で、「谷小屋」と呼ばれて親しまれていた。下宿する部員も居たが、間仕切りのない開放的な一軒家で、自由に使えた。誰かが酔っぱらって、雨傘の剣先で板壁を突き破り、穴を開けたこともあった。

わたしは両方の研究会に出ていた。極地研究会には、第一次南極越冬隊で西堀さんと越冬した北村泰一さんもよく出席され、色々と助言をいただいた。北村さんは京大山岳部の一〇年ほど先輩で、当時は同志社大の教員だった。

３回生の時にわたしはヒマラヤ登山を実現できたので、次は何とか南極行を実現したかった。いろいろ調べていくうちに、南極大陸のなかでもクイーン・マウド・ランドという広大な地域が、ほとんど未踏のまま残されていることが分かった。そしてアメリカが、その地域の大々的な調査を計画していることを知った。これらのことをまとめた資料を作り、極地研究

会で発表した。

これで気持が納まるわけがない。なんとかこの計画にもぐりこめないだろうか。そこで思い切って、雲の上の大先輩・西堀さんにお会いして、相談することにした。東京のオフィス街の昼休み。初対面でドキドキしているわたしの前に、バネのある歩き方で西堀さんが現れた。わたしは大学４回生、西堀さんは原子力船の仕事をされていた頃だった。

近くの地下食堂に入り、びっくりするほどうまいカレー・ライスをごちそうしてくれた。西堀さんは、こう言われた。「アメリカがぜひ君に来てほしいと思うような、独創的なものを持ちなさい。」この言葉は、他力に頼ろうとしていた、わたしの目を覚ましてくれた。

翌一九六七年一一月から、わたしはブータンへの入国交渉のためインドに長期滞在していたが、西堀さんの言葉を時々思い出していた。南極氷床の観測で、何か独創的な方法はないだろうか。たとえば、氷床の流動速度を真空を利用した道具でうまく測れないかとか、つたない妄想をめぐらせていた。ところが、二月になってニューデリーの宿に届いた手紙で、南極への道が開けることになる。帰国後に入る名古屋大学大学院・雪氷研究室の樋口敬二教授からで、日本の越冬隊に参加しないかという。六月にブータ

ンから帰国して五ヵ月後には、砕氷船「ふじ」に乗って、わたしは南極へ向かっていた。

《「探検における機械と人間」
～西堀さんの発言から》

南極越冬からわたしが帰国したあと、一九七二年に『探検と冒険』全８巻（朝日新聞社）が刊行された。編集委員は、加納一郎・泉靖一・梅棹忠夫・樋口敬二・本多勝一の皆さん。各巻は特集される対象地域によって分かれ、第８巻は「海と空」。その編集を名大の樋口教授が担当されたので、大学院生のわたしは編集を補佐した。その巻頭では、西堀さんを名古屋に迎えて、「探検における機械と人間」をテーマに対談が設けられた。一九七〇年一二月のことで、わたしも同席した。その場で印象に残った西堀さんの発言から、要点をひろってみる。

一九七〇年に初めてソ連が、月面で無人探査機を走らせることに成功した。これも探検と言えるかと、樋口さんが問う。「そりゃ探検ですよ。こんど金星へ飛ばしたのも、人間は乗っとりゃせん。それでもわたしは、エクスペディションだと思う。昔からの探検の目的は、地理的未知を開くためですよ。だから、無人車による観測も立派な探検や。」

わたしにも発言が求められ、機械による観測だけ

では、人間が行くことによって感じられるロマンチシズムに欠けることに触れた。すると西堀さんは、人間が行けば生命を危険にするアドベンチャーの要素が加わる。探検の良さと切り離せない楽しみがアドベンチャーにはある、と述べられた。

ここまでは、全体の会話の始めの三分の一ほどの、ほんの一部。終盤になって、樋口さんが、雪上車の故障なら努力で直す余地があるが、飛行機が危機に直面したらどうしようもない、と言った時、西堀さんから次のような発言が飛び出した。

「その時わたしが旅客機で飛んでいるとしてね、ああ周りの人はみな死によるんや。（声を大にして）おれは死なんッ、と思うんです。飛行機がどんな落ち方をしても、必ず臨機応変の処置をとってやろうと思おうとするのです。すると心が平静になり、危険に対してパッと適切な処置がとれるのです。」

そして、少しやりとりがあってから、座談会は西堀さんの次の言葉で終わる。「やっぱりこれからロケットに乗って月でも探検しようというアドベンチャーをふくめて、探検でもしようというならば、それぐらいの勉強をして実力をつけ、うぬぼれでも何でもいいから、心の平静が保てる範囲の自信は持ってないといかんのです。」

《ヤルン・カンの西堀隊長七〇才》

一九七三年にＡＡＣＫから派遣されたヤルン・カン隊は、前年の一〇月から遠征に必要な経費の募金活動を始めた。八千メートルをゆうに越える巨峰なので、予算も巨額になる。しかし募金の出足は不調で、翌月から東京方面で本格的な募金を始めることになった。そこで、社会的にも名の通った西堀さんを隊長に迎える方針が、今西さんあたりから出ていた。西堀さんは南極第一次越冬隊長をされ、科学者としても著名であった。

西堀さんは当時、日本生産性本部の理事をされていた。募金で多くの会社を回ってもらうには、カバン持ちが必要だ。そこで、わたしが東京駐在員として京都の本部から送り出された。こうして、西堀さんとは三度目の、しかも今回は深い関わりをもつことになる。

一一月半ば、京都の老舗すき焼き亭で、資金難など前途多難な状況を決起して切り抜けようと、集会が持たれた。西堀隊長、樋口明生登攀隊長ら、決定した一五人のメンバーが発表された。いまだに遠征の実現すら危ぶまれるなか、西堀隊長はご自身の近著の題名『石橋を叩けば渡れない』をひいて、隊員たちを激励した。そのあと、ヤルン・カン計画の生みの親ともいえる今西さんが立って言った。「丸木橋は一

気に渡れ。」

東京方面での募金は、西堀さんだと訪問先の会社ではトップ・クラスの方が会ってくれるので、話がはやい。たとえば本田技研工業では、創業者の本田宗一郎社長（当時六六才）に直接会うことができた。本田社長は個性の強い方だと知っていたが、客人への物腰は、やわらかかった。以前からの知り合いらしく、親しそうな会話のなかに、西堀さんへの敬意がにじんでいた。

このようにして、募金活動は軌道に乗ってきた。そして翌年二月二〇日には、ネパールの亜熱帯の街ダーランからヤルン・カンに向かう、ポーター約五〇〇人の大キャラバンが始まった。西堀隊長には馬子が引く馬が用意され、さっそうとした馬上の人となっていた。

山奥へ進むほどポーターの人数不足などで日程が遅れ、隊長がツェラムに到着したのは三月一三日だった。ヤルン氷河末端・高さ三八〇〇メートルの地点である。ヤルン・カンの登攀中、隊長はここに主に滞在することになる。ここで隊長は、出国前に免許を取得してきたアマチュア無線局を開設した。ヤルン・カン地域の天気予報を、日本に居る専門家から、無線で受取ろうとする試みだ。

ヤルン・カン登攀のベース・キャンプはヤルン氷河上、

高さ五二一〇メートルの地点にある。そこに向かって四月一六日、隊長たちはツェラムを出発し、氷河上の悪路を乗り越えていった。一九日、ベース・キャンプに到着する時、わたしは迎えに出た。隊長は五、六歩すすむたびに岩に腰をおろして休んでいた。

そんななかでも隊長は、わたしがヤルン・カン一帯を測量するために設けた基点を見に行きたいと言う。無理は明らかなので引き止めた。この日、上部では第三キャンプが設営された。夜になると、隊長は一人で星の天測をしていた。この天測に科学的な意味があるとは、わたしには思えない。だが西堀さんにとっては、これをすることは行動の規範みたいなものかもしれない。

ベース・キャンプの食事用テントに隊員たちが集まった時、隊長は「ＡＡＣＫザイル論」をしみじみと語った。山岳会のメンバー一人一人は一本一本の繊維であり、それらがより合されて一本の強いザイル、すなわち優れた伝統ができるという。そして古い写真を取り出した。伊藤愿さんの遺影だ。

伊藤さんはＡＡＣＫのヒマラヤ初登頂のために先頭に立って奔走されたが、その実現をみることなく、一九五六年に四八才で病没された。隊長は、しんみりとして言った。「この伊藤君の写真を頂上に埋めてきてほしい。」

隊長はここで三泊し、ツェラムへ戻る。ベース・キャンプを去る前日夕刻の定時交信で、隊長の声が上部の各キャンプに流れた。「わたしは自分がベース・キャンプまで着けるようなら、ヤルン・カンのピークは登れる、と信じてここまでやってきました。諸君もだから、がんばってください。これまで一緒にすごしてきて、わたしは諸君がすばらしい若者たちであることを知り、誇りに思っています。どうぞみなさん、西堀がツェラムで諸君を待っていることを、忘れないでください。」最後の方は、よほど思うところがあったのか、声がつまっていた。

五月一四日午後六時、松田さんとわたしはヤルン・カンの頂上に立った。小雪まじりのなか、松田さんはセルロイド・ケースに入った伊藤さんの遺影を頂上の雪に差し込んでいた。それをわたしは、ピッケルのシャフトでコンコンとたたいて、雪に埋め込んだ。

●　二三年上の梅棹忠夫さん

《作文の師匠》

一九六四年一〇月、京大山岳部隊はネパールのアンナプルナ南峰（別名ガネッシュ）の初登頂に成功した。登山のあと現役部員四人は、二手に分かれて二ヵ月近くヒマラヤ山中をワンダリングし、翌年二月に

帰国した。そして一九六六年九月、吉野・上田・木村・島田の学部生による共著『ガネッシュの蒼い氷』が「アサヒ・アドベンチュア・シリーズ」（泉靖一・梅棹忠夫監修、朝日新聞社）で刊行された。梅棹さんがこの本作りの間に授けてくれたことは、その後もずっとわたしのなかで大切にしてきた。梅棹さんが四五才の頃のことである。

本は、四人が原稿を分担する四部構成とした。まず、京大山岳部に入部した新人が、高さ七千メートルを越えるヒマラヤ未踏峰の初登頂を企てて出発にこぎつけるまでを年長の吉野が、登頂記は年少のわたしに花？をもたせてくれ、二組に分かれたワンダリングをそれぞれ木村と島田が書くことになった。

最初にわたしたちの原稿に目を通した梅棹さんは、おだやかな京都弁に熱をこめて言った。「これではあかん。自分の事を書け。個人の思いを伝えよ。遠慮はいらん。主観的に書け。」この言葉でわたしたちは頭を切りかえ、気持を込めて自分の思いを書くことにした。

梅棹さんは、作文の基本的なことから伝授してくれた。それらは一九六九年に刊行された岩波新書の大ベストセラー『知的生産の技術』にも書かれている。その刊行前に梅棹流の直伝を受けられたわたしたちは、幸運だった。

梅棹さんが原稿を見るときは、切れ味のよいハサミと糊を側に置き、原稿を切ったり貼ったりの手作業になった。今では、ワープロのマウスを使った切り貼り操作にあたる。ハサミで分断されて短冊状になった原稿は、順番が大きく入れ替えられ、新しい原稿用紙の上にならべられた。要所・要所で短冊と短冊の間にスペースがとられた。梅棹さんはわたしたちから、読者にとって抜けている情報や著者が伝えておくべき事柄を聞き取りながら、万年筆を走らせてスペースを埋めていった。

わたしたちは、原稿を書きなおしながら、北白川にあった梅棹さんのお宅に通った。当時は大阪市立大学の助教授で多忙を極め、帰宅は夜遅くなるのが常だった。奥様が出してくださるタカラビールを飲みながら、四人は待った。

やっと梅棹さんが帰宅しても、疲れきっていたり、酔っていたりで、そのままバタンと寝てしまうこともよくあった。それを、奥様が力ずくで起こしてきてくださった。こうして、徹夜でつきあってくれたこともあれば、原稿を見てもらえないまま帰ったこともあった。そうこうしているうちに、わたしたちの原稿は、梅棹さんに手を加えられることなく読んでもらえるようになっていった。

こうして『ガネッシュの蒼い氷』は、めでたく刊行さ

れた。梅棹さんは、この本の書評を集めて冊子を印刷して配ろうと言った。そこまでしなくてもと、わたしたちは思ったが、秘書の方が新聞・雑誌などから集めてくれた書評は、一五篇もあった。四人にとって面はゆいような、うれしい評価がならんでいた。書評集の作成は、今になって思えば、わたしたちに自信を持たせようという、梅棹さんの配慮があったのかもしれない。

文章表現で、目が開かれる思いをしたきっかけがある。梅棹さんに原稿を見てもらい始めた頃、わたしの原稿に目を通していた梅棹さんが、「ケラ、ケラ、ケラ」と声をたてて笑った。そこは、気張って美文調に書いた部分だった。情景の描写だったろうか。そこで言われたことを、わたしは次のように受けとめた。力まず自然体で、やさしい言葉を分りやすく配していけば、書き手の思いや感動は、すなおに伝わる。そして、映画のコマが流れていくように、臨場感のあるカットを描写していくように心がける。

二〇〇七年春、わたしは名大を定年退職した。時間が取れるようになったので、ずっとあたためていた二〇年以上前の南極内陸での越冬・探査旅行記の執筆にとりくんだ。二年半ほどかけて書き上げ、出版してくれる所をさがした。

ある編集者は出版を断りながらも、わたしの文章

について、原稿を仲介してくれた友人に、こんなコメントをくれていた。「ドキュメンタリー映画のカメラを自分が手にしているかのように、よく見渡せます。」このコメントは、梅棹さんとの日々以降、まさにわたしがずっと目ざしてきたことで、うれしかった。これを支えに、その後も一年半かかったが、出版にこぎつけることができた。

《極地探検への若い情熱》

日本の第一次南極観測隊の西堀越冬隊長による『南極越冬記』（岩波新書、一九五八）は、大変なベストセラーになった。西堀さんは、この本の「あとがき」に、「わたしは生来、字を書くことがとてもきらいである」と述べている。この本は、西堀さんの越冬中の記録や帰国後の講演録などをもとに、梅棹さんがまとめて書きあげたと言われている。刊行は、越冬隊が帰国した一九五八年三月から間もなくの七月末。しかも梅棹さんは、東南アジアでの半年ほどかけた人類学調査から四月に帰国したばかりで、大へん忙しかったはずだ。

梅棹さんにとって、南極は専門分野から離れているが、若い頃、極地探検には強い情熱を抱いていた。旧制三高の三年生で二〇才だった冬、京都探検地理学会カラフト踏査隊に特に参加を許された。一九四

〇年一二月に京都を出て東京で西堀さんから種々の指導助言を受け、翌年一月にかけて現地で行動した。そのときの成果は「犬橇の研究～主として樺太の犬橇の形態と機能について」として一九四三年、わたしが生まれた年の探検の専門雑誌『探検』に掲載された。この雑誌の編集者は、のちに梅棹さんが探検ジャーナリストと呼んだ加納一郎さんだった。

この論文は、収録されている『梅棹忠夫著作集・第1巻・探検の時代』（中央公論社、一九九〇）で七〇頁を占める大論文だ。その「まえがき」では、白瀬隊のあと再び南極の解明を試みるために、イヌぞりの研究の重要性も認められてきた、と書いている。結論として、世界と比べて日本のイヌぞりは劣っており、その改良点を述べたあと、精神力でおぎなってでも、あえて極地に挑戦を辞さない、とまで記した。

戦後一〇年を経て日本が第一次南極観測隊を派遣することになり、犬ぞりの訓練が北海道で行われた。そのとき梅棹さんも、頼まれて現地を訪れている。南極観測の開始にあたって朝日新聞「論壇」には、『「観測」だけでなく「探検」せよ』と寄稿もした。だから梅棹さんは、スンナリと西堀さんになりきったようにして、『南極越冬記』を仕上げられたのではと、わたしは思う。

《梅棹さんから授かったもの》

ガネッシュで初めて氷河を体験し、それを研究する分野があることを知ったわたしは、その道をめざすことにした。まず北大の低温科学研究所へ修行に出ようと決めた。ガネッシュの本作りの合間の雑談で、その話を聞いた梅棹さんは、札幌に行くのなら、加納一郎さんと北大理学部の樋口敬二に会うようにと言った。

加納さんが書かれた極地探検の本は愛読していたが、樋口敬二という方をわたしは知らなかった。「ぼくは無口なんで、お会いしても話すことがありません」と戸惑うわたしに、「ただ座っておれば、樋口はなんぼでもしゃべってくれる」と梅棹さんは言った。

三高山岳部ＯＢでＡＡＣＫ会員でもある樋口先生にお会いした際、こう言われた。・・・これから名大へ移って氷河の研究を始める。氷河の無い日本で、しかも雪の無い名古屋で氷河を研究することには、地球の科学として氷河をとらえるという意味がある。君もいっしょに始めないか。

わたしは、名大の大学院に入った。これが後に、南極やヒマラヤ・チベットでのフィールド観測をつづけていく道への岐路となった。梅棹さんが樋口さんに会えと言ってくれたことが、研究の道筋を見通す視界を広げてくれたことになったのだ。

名大を定年退職する記念の会の講演で、わたしはヒマラヤや南極での行動をスライドで振り返っていった。その冒頭はガネッシュ登山であった。そこで帰国後の梅棹さんの作文指南による本作りにもふれ、大学生時代に受けた一番大切な教育だったと述べた。

この『ガネッシュの蒼い氷』を出した経験がなければ、その後の拙著『残照のヤルン・カン』（中央公論社、一九七九、一九九一）も、『未踏の南極ドームを探る～内陸雪原の１３ヵ月』（成山堂書店、二〇一二）の出版もなかっただろう。今西さんや西堀さんから学んだ思考・精神は、大きくかけがえのないものだが、梅棹さんはさらに、実用的な役に立つ術をも授けてくれたのだ。